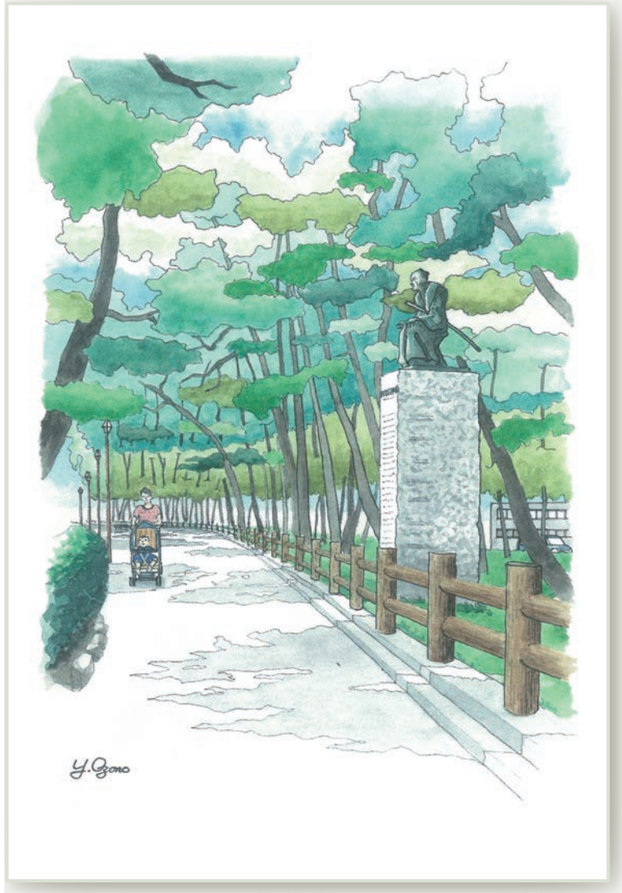
明治維新を分かりやすく、楽しく
ISHIN 維新

維新ふるさと館情報紙
【 No.12 】
■ 平成26年(2014年)冬季号
■ 発行：鹿児島市 維新ふるさと館
〒892-0846 鹿児島市加治屋町23番1号
TEL.099-239-7700 / FAX.099-239-7800
http://www.ishinfurusatokan.info

薩藩財政の救世主
「調所笑左衛門広郷」



調所広郷像（鹿児島市天保山町）　画 / 大園 康広

維新を歩く

かつては、鹿児島市内の海岸の各所にみられた美しい松林も、今ではこの甲突川河口の天保山一角でしか見られなくなった。

この松林の道路沿いに、腰をかがめ、背中を丸めて重荷を背負ったように建っている銅像がある。五百万両という途方もない藩の借金財政を立て直し、藩財政の救世主となった家老の調所笑左衛門広郷である。だが、晩年は幕府による藩の密貿易追及の責任を一身に受け、服毒自殺にて果てた。

この銅像をよく見ると、家老の身でありながら、調所の腰には脇差のない大刀だけの一本刀であることに気づく。

島津重豪、斉宣、斉興と三代にわたる歴代藩主の前で、十年以内に借金財政の立て直しを命ぜられ、再三「自分には才なく不可能」と断るが、主君の命令には逆らえず、切腹覚悟で引き受けた。そうした調所の気持ちを察した重豪は、「お前の脇差預かりおく」と、調所の脇差を取り上げた。

このエピソードにちなみ、銅像制作者の木佐貫熙氏は、調所の銅像をあえて一本刀の姿にしたという。

赤貧洗うがごとき下級武士出身の茶坊主が、家老にまで出世した例は他になく、藩で唯一の人物である。重税や苦役を強いられた民衆からは、悪家老とのイメージを持たれがちであったが、元来、誠実な人柄で優れた才覚を持ち、商人たちからの信頼も厚かったがゆえに改革も達成できたのである。調所の貢献なくしては、斉彬の集成館事業も、また、明治維新における薩摩の活躍もなかったといってよい。

「もう、肩の荷をおろしてゆっくりと世を眺めては」と、語りかけたい思いである。

（文/福田賢治維新ふるさと館特別顧問）

■維新ふるさとショップ いいね! とお客様

●小物展では、雑貨など約30点を展示・販売します

●屋久杉と孟宗竹の箸、人気です

●いろは歌、斉彬の全てを網羅

今年7月のオープン以来、大変ご好評いただいている同ショップ。来年も鹿児島の特産品、幕末、明治維新に関する書籍など、商品の充実を図ってまいります。「こんな商品があったらいいな」等、皆さまの声をお聞かせください。

■新春大島紬小物展、開催

好評だった「屋久杉・孟宗竹のお箸展」に引き続き、2015年新春第一弾は「新春大島紬小物展」を開催します。ハンチング帽やストール、髪飾りや文房具まで、いろいろな大島紬小物を取り揃えています。新しい一年を、お気に入りの大島紬とともにいかがでしょう。

■新商品が入荷しました

さつま和紙はがきセット、明かり（さつま和紙）、いろは歌、島津斉彬の書籍等（島津興業）が、新しく入荷しました。

さつま和紙とは、屋久杉を細かくくだいたチップ、サトウキビの搾りかす、孟宗竹の皮など、鹿児島ならではの素材を漉き込んだ和紙です。「ものを包む・暮らしを包む・こころを包む」をコンセプトに、職人が心を込めてつくった作品をぜひご覧ください。

2015年の「初笑い」は 加治屋町・維新ふるさと館から

維新ふるさと館「新春寄席」を2015年も開催します。
今回のテーマは「薩藩留学生㊙話」。ご家族、お友達とぜひお越しください。

日　時　1月17日(土)・18日(日) 2日間公演／午後6時～7時30分
出　演　桂 竹丸 師匠
　　福田 賢治 維新ふるさと館特別顧問
入場料　前売券1,800円（当日券は2,000円）
　　※全席 自由席　※各日とも限定150名様
＊前売券のお買い求めは維新ふるさと館まで

温故地新　故（ふる）きを温（たず）ね、地元を新たに。

■玄関前に菊、「さすがですね」

薩摩維新ふるさと博の期間中、㈱島津興業のご厚意で当館入口に菊が飾られました。同時期に「菊まつり」を開催していた仙巌園の立派な懸崖つくりの菊に、「さすがですね」と多くのお客様が記念写真。また菊の成長を楽しみに毎日来館される方もいらっしゃいました。

●いつもより豪華なエントランス

■パンフレットをリニューアル

開館20周年、入館者300万人達成を記念してリニューアルしたパンフレットが大好評です。「明治維新を分かりやすく、楽しく」が当館のモットー。新パンフレットは今までより写真が多く、シンプルです。またパンフレットのダイジェスト版のチラシも同時に作製。当館PRに活用しています。

■今年もお世話になりました

平成26年も当館をご支援いただき誠にありがとうございました。
良いお年をお迎えください。

観光客などで賑わう 薩摩維新ふるさと博開催

10月23日から11月9日まで、歴史ロード“維新ふるさとの道”で「薩摩維新ふるさと博」が開催されました。「維新と出逢う時間旅行」をテーマに実施された同イベントは、明治維新150年カウントダウン事業の一環として今年から実施。期間中は武家屋敷でのお芝居の上演、特設ステージでの郷土芸能の披露、示現流・薬丸自顕流の実演、人力車体験などイベントが盛りだくさん。明治維新当時の服装をしたキャスト「明治維新おもてなし隊」は会場のいたる所で大人気でした。

当館は「維新ふるさとCafé」を開店、薩摩藩英国留学生が、航海の途中で飲んだであろう珈琲「薩摩スチューデント珈琲」と神村学園（いちき串木野市）パティシエ科の生徒が作ったお菓子を販売。大好評でした。

●おもてなし隊、記念写真にひっぱりだこ

●のぼり旗でお祭りムードいっぱい

●珈琲ショップは初めての試み

●森市長もご来店

維新ふるさと館 歴史シンポジウムに430人来場

●県内外の歴史家の視点で熱い議論

11月22日鹿児島市中央公民館を会場に、当館歴史シンポジウムを開催しました。「SATSUMAの人材育成と近代化」と題し、第1部では、歴史家・作家の加来耕三氏が薩摩藩をはじめとする幕末諸藩の近代化と人材育成を当時の日本の動きを紹介しながら、基調講演。

第2部では、薩英戦争で先進欧米諸国の威力と攘夷の不可能を認識し、富国強兵、殖産興業など「近代化」の必要性を学び、そのためには「人材育成」が重要であることを痛感した薩摩藩について、肥後秀昭（当館歴史解説員）がコーディネーターを務め、加来耕三氏、吉満庄司氏（鹿児島県知事公室政策調整課専門員）、福田賢治（当館特別顧問）3名のパネリストが熱い議論を交わしました。

聴講者の皆様からは、「基調講演は楽しく分かりやすかった」「パネリストの話も興味深く、いろいろ考えさせられた」等、感想が多数寄せられました。今後とも皆様の貴重なご意見を参考に、このシンポジウムを実施してまいりたいと思います。

●鹿児島へのエールも送った加来先生

「薩摩スチューデント、西へ」アメリカへ ～長沢鼎の子孫からの手紙～

●熱い気持ちのつまった手紙に感動

薩摩藩英国留学生の中で最年少13歳で渡英、その後アメリカでワイナリーを開き、「カリフォルニアのぶどう王」と呼ばれた長沢鼎。

そのご子孫が今夏に来館され、ドラマ「薩摩スチューデント、西へ」を鑑賞。その後「あのドラマにはとても感銘した。若い家族にも祖先のことを知ってほしいので、ぜひコピーをわけてください」との熱烈な手紙が届きました。しかしドラマのDVDなどは販売しておらず、また当館のドラマは三面スクリーンで上演しているため、1枚に集約することができるのか、著作権の問題は、など多くの課題がありましたが、2か月後、やっとご希望に沿うことができ、DVDをアメリカへ送りました。

そして今月はじめ、お礼の手紙が届きました。2世、3世となり日本語の読み書きができる者なく、薩摩スチューデントの歴史はほんの僅かしか知らないとのこと。

「I have been learning more and more」

薩摩藩英国留学生の偉業など、多くの人々に伝わることを願っています。

■～小社研作品展～ 来館者に大好評

●来館者も驚きの出来ばえ

11月9日～16日、鹿児島県小学校社会科作品展を当館で開催。この作品展は、小学生の社会科への興味関心を深め、社会科教育の発展を図ることを目的に開催されており、当館での開催は今年で2回目。入賞作品計27点がずらりと並びました。

来館者からは、「どの作品もうまくまとめられていて、感心した」「歴史を題材にした作品が多く、鹿児島の子どもらしい内容でよかった」などの感想が寄せられました。鹿児島の歴史を伝える施設として、子どもたちの“知りたい気持ち”にこれからも応えていきたいと思います。

館の宝物

黒田清隆書「敬譲則不競於物」

黒田清隆は、明治政府の北海道開拓使長官・陸軍中将などを経て首相として大日本帝国憲法発布の式典を挙行した薩摩の明治の元勲の一人である。

黒田は、天保十一年（一八四〇）十月十六日、鹿児島城下の新屋敷（現在の樋之口）に生まれた。父は城下士とはいえ四石取りの薄給で、少年期の清隆通称了介はとりたてて述べるほどの話も残しておらず、注目されたのは、二十歳過ぎに砲隊の一員として、大砲の試射における砲手の役を仰せつかったときである。絣の着物に兵児帯を締めた二才ぶりに「よかにせじゃ」という声が聞こえたという。薩英戦争後、黒田は大山巌らと江戸の洋式兵術の名門江川塾の塾生になり、砲術の皆伝を受けた。幕末も押し迫った慶応元年の暮れには西郷の命を受けて長州に赴き、木戸孝允と会談、坂本龍馬の周旋もあって、翌慶応二年正月の薩長同盟成立の仲介役として活躍している。

戊辰戦争では、庄内藩の開城に伴い西郷の指示を受けて寛大な措置を実行。後に家老菅実秀が当時のお礼に参上した際にも黒田は「全ては西郷の功労である」と笑って答えたという。また、函館戦争では、降伏した榎本武揚の助命嘆願のため、頭を丸めて「降将を辱めず」の薩摩魂を発揮している。明治政府では北海道開拓に尽力。開拓次官・開拓長官として、札幌農学校の設立や屯田兵制度を創設した。

さて、本書は「敬譲すなわち物に於いて競わず」と読み、「敬譲（つつしんで人に譲る）とは、物事を競って争わない」という意味である。西郷が遺訓のなかで「人を相手にせず天を相手にせよ。天を相手にして己をつくし、人を咎めず、我が誠の足らざるを尋ぬべし」と言っているが、黒田のこの書もお互いが尊敬や敬譲の気持ちを持っていれば争うこともないという精神を表したものであるように思われる。

写真は、平成二十六年十一月に東京の憲政記念館において開催された「明治に活きた英傑たち」展に、当館より貸し出され、展示された黒田の掛け軸である。

●衆議院憲政記念館（東京都千代田区）